

# 韓国語における 「*ul*」格名詞句の重出をめぐる ——事実関係を再考する——

禹 吳穎

[キーワード：①韓国語 ②助詞「*ul*」 ③目的語 ④「*ul*」格名詞句重出構文  
⑤強調の意味]

## 1. はじめに

格関係に関する意味を明示的に表す方法には、一般に①「語順」、②「名詞の語形変化」、③「名詞の前か後ろに格関係を表す付属語をつける」という三つの方法がよく知られている（寺村（1982））。日本語と韓国語は、③の方法を採り、専ら後置式である<sup>1)</sup>。

- (1) a. 太郎が 花子を ぶった。  
b. 철수가 영화를 때렸다.  
Chelswu-ka Yenghuy-lul ttayli-ess-ta  
C.-NOM Y.-ACC hit-PAS-DEC

(1a) (1b) の表層の文に表れている他動詞「ぶった」・「ttaylita」の目的語（名詞句）は、任意に目的語標識(object marker)「ヲ」・「*ul/lul*」<sup>2)</sup>（以下、断りが無い限り「*ul*」と表記する）を伴って現れることが多い。

現代日本語では、(2a) (3a) のように、一文中（表層の文）に「ヲ」格名詞句が二つ連続して用いる（いわゆる「二重ヲ格構文」）ことが許されないが<sup>3)</sup>、現代韓国語では、日本語に比べ、(2b) (3b) のように、一つの動詞に二つの「*ul*」格名詞句が呼応することが、比較的によく見られる（次の文の「\*」は、不適格性を示す）

- (2) a. \*太郎が 花子を 背中を 押した。  
 b. 칠수가 영희를 등을 밀었다. (Nam, Kisim (1996: 53))  
 Chelswu-ka Yenghuy-lul tung-ul mil-ess-ta  
 C.-NOM Y.-ACC back-ACC push-PAS-DEC
- (3) a. \*彼가 丸太を 椅子を 作った。  
 b. 그가 통나무를 의자를 만들었다. (Nam, Kisim (1996: 53))  
 ku-ka tongnamwu-lul uyca-lul mantul-ess-ta  
 He-NOM log-ACC chair-ACC make-PAS-DEC

本稿では、(2b) (3b) のように、従来、許容されると言われてきた韓国語の「ul」格名詞句重出構文を考察の対象とし、果して母語話者にどの程度許容されるかを明らかにする。また、韓国語における「ul」格名詞句重出構文の位置づけを試みることを目的とする。

具体的な手法としては、まず、学校文法における目的語の定義及びその問題点、「ul」格の「強調的意味」を表す補助詞用法について検討し、韓国語における「ul」格名詞句重出構文に関する先行研究を概観する。次に、韓国語母語話者を対象に行ったアンケート調査結果を概観する。最後に、そこで得られた知見をもとに、先行研究と照らし合わせて「ul」格名詞句重出構文の事実関係について検討するという手順を踏む。

## 2. 理論的背景

韓国語の「ul」格名詞句重出構文について、具体的な検討に入る前に、本節では、いくつかの理論的な背景について触れておく。以下、学校文法における目的語の定義及び問題点、目的語の定義、従来の動詞の自・他に関わる目的語の役割、「ul」の強調的意味を表す補助詞用法について概観する。文を構成する成分として、中核的成分になる「主語」、目的語、「述語」や周辺の成分になる「補語」との四つ成分を認めている現実に照らし合わせて考えた場合、目的語の定義は非常に重要であろう。まず、目的語の定義に関わる問題から若干の考察を行う。

## 2.1 学校文法における目的語の定義及び問題点

目的語は、統語的には動詞と連用の関係で組み合わせられるため、述語の前に存在し、形態的には名詞句（体言ないし動詞や形容詞の体言化形）に「*ul*」を付与することで現わされる。さらに、名詞句が「*ul*」格を伴わない（省略）形式で文中に現れることもある。しかし、「*ul*」を付与することが可能な名詞句がすべて目的語になるとは限らない。たとえば、

- (4) a. 길을            걸었다.  
           kil-ul            kel-ess-ta  
           way-ACC    walk-PAS-DEC  
           道を            歩いた。
- b. 하늘을           날았다.  
           hanul-ul        nal-ass-ta  
           sky-ACC        fly-PAS-DEC  
           空を            飛んだ。

のように、「*ketta*」（歩く）、「*nalta*」（飛ぶ）などは、自動詞であるにも関わらず、「*ul*」格名詞句と共に起しており、「*ul*」格の有無のみで動詞の自・他を判断するならば、これらは他動詞となるだろう。*Choy, Hyenpay* (1937/1982: 256- 257) は、「*ul*」格を付与することが可能な名詞句は、すべて目的語に成り得ると述べられている。また、それは学校文法にも受け継がれ、現行の学校文法によると、「他動詞の行為が及ぶ対象を目的語と呼ぶ。目的語は体言に目的語助詞「*ul*」が付いて成立するのが原則である」（教育部（1991: 74））と述べられており、これらの定義に従うならば、(4a) (4b) の動詞は他動詞になってしまう。しかし、目的語とは、そもそも他動詞の行為による影響や支配を受ける名詞句を表すものであり、動詞の行為を限定する働きをするものではないと考えられる。仮に、共起する名詞句が動詞の行為を限定するならば、それは修飾語の働きをするであろう。

- (5) a. 철수는 학교에 갔다.  
 Chelswu-nu hakkyo-ey ka-ss-ta  
 C.-TOP school-LOC go-PAS-DEC  
 チョルスは 学校に 行った。
- b. 철수는 학교를 갔다.  
 Chelswu-nu hakkyo-lul ka-ss-ta  
 C.-TOP school-ACC go-PAS-DEC  
 チョルスは 学校を 行った。
- c. 철수는 학교-ϕ<sup>4)</sup> 갔다.  
 Chelswu-nu hakkyo ka-ss-ta  
 C.-TOP school go-PAS-DEC  
 チョルスは 学校 行った。
- d. 철수는 학교에를 갔다.  
 Chelswu-nu hakkyo-ey-lul ka-ss-ta  
 C.-TOP school-LOC-ACC go-PAS-DEC  
 チョルスは 学校に을 行った。

上記の (5a) (5b) を見られたい。学校文法に従うと、移動動詞「kata」(行く) と共起する名詞句はそれぞれ異なる働きをすることになる。すなわち、(5a) は副詞語、(5b) は目的語として扱われている<sup>5)</sup>。しかし、意味的に考えた場合、両方とも〈着点〉(Goal)を表すにも関わらず、同一環境で副詞語と目的語の二つの機能を有することになるという矛盾が生じてしまう。これは、元来の目的語の機能とはかけ離れており、また、副詞語との混同を招きかねない。また、(5c) のような無標識の場合、副詞語になるか、目的語になるかの認定すらできなくなる。さらに、(5d) のような「-ey-lul」はどう捉えれば良いのであろうかなど、様々な問題点が考えられる。本稿は、(5b) (5d) の「ul」は、話者の表現に対する「強調」の意味を表すと考えている。すなわち、文法的関係を表す格助詞の用法ではなく、種々の語に結合し、それらの語にある意味を付け加える補助詞（日本語の副助詞(Adverbial Particle)に相当する）の働きをすることを考えられる。これと関連して、Pak, Sungpin (1935: 209) は「-ey → -ey-lul → -ey-l → -lul」のような発音中の音便による変形過程があるため、この場

合の「ul」は直接目的語(direct object)ではないと指摘している。従って、副詞語に置換できる「ul」格名詞句は、たとえ「ul」格が結合していても、目的語とは認められないことになる。なお、この「強調」を表す補助的な用法については2.4節で詳しく見ることにする。

## 2.2 目的語の定義

本節では、幾つかの国語文法書における目的語に関する定義について概観する。

*Pak, Sungpin* (1935: 208) は、「目的語は動詞の動作を受ける事物を表示する名詞」であり、*Kim, Minswu* (1971: 133) は、「構文上の述部の構成に必要な根幹要素で、述語の行動叙述に対する直接対象で、一般的に「何を」に該当する構文要素である」と述べられている。また、*Se, Cengswu* (1996a: 695) は、「目的語は動詞の前で「ul」のみ添加可能な名詞句である」と指摘している。これらの定義は、捉え方は若干異なるものの、内容は大同小異であろう。*Kim, Minswu*の「直接対象」と限定した点、*Se, Cengswu*の「「ul」のみ添加可能な名詞句」と限定した点から、同一単文中には目的語が一つしか存在し得ず、一つの名詞句に添加される「ul」が同一の環境において何ら意味の差を生じず、その他の副詞語に置換し得る場合は、目的語ではないといえる（以下、このような目的語を「擬似目的語」と呼ぶ）。すなわち、同一単文中には「一つの目的語のみ」の存在が許される（以下、このような目的語を「真性目的語」と呼ぶ）ということを指摘していると考えられる。以上の目的語の定義を参考にし、本稿では、「動作の直接的な影響を受ける対象で、「ul」のみが付与可能な名詞句」と定義しておく<sup>6)</sup>。

## 2.3 従来の動詞の自・他の区別に関わる「ul」格の役割

すべての動詞は、自・他の何れかに属するが、すべての動詞がそれぞれ対応する自動詞ないし他動詞を持っているわけではない。また、動詞

の自・他は、文の構成上、他動詞は目的語を取る、自動詞は目的語を取らないという著しい相違があることを認めなければならない。そして、名詞句に付く格助詞「*ul*」が、表層における目的語の目印となる。しかし、表層における目的語標識「*ul*」の有無だけで動詞の自・他を区別するのは、2.1節ですでに触れたように若干無理があろう。

韓国語の動詞の自・他の区別について、*Choy, Hyenpay* (1937/1982: 255) は、

남움직씨 (他動詞) 는 다른 것 (남) 을 제움직임 안에 잡아 닥아, 그  
것을 부리는 (支配하는) 움직임을 나타내는 움직씨를 이룸이요; 제움  
직씨 (自動詞) 는 그러하지 아니하고, 다만 제만이 움직임을 나타내  
는 움직씨를 이룸이니;

그 말하는 사람의 마음먹기의 다름을 따라서, 남움직씨가 되기도 하  
고, 제움직씨가 되기도 한다. (下線は引用者)

他動詞は他物を自己の範囲の中に引き入れて、それを支配する動きを表す動詞であり、自動詞はそうでない動詞で、ただ自己の動きを表す動詞である。また、話者の「主観的判断」により自動詞にも他動詞にもなる。(筆者訳)

と述べている。つまり、動詞の自・他を区別する基準を話者の「主観的判断」によるものであり、その決め手となるのは「*ul*」格の有無ということになる。しかし、例えば、自動詞にも他動詞にもなる、いわゆる「両用動詞(double-sided verb)」の分別基準を、単に話者の主観的判断に委ねるということについては議論の余地があるように思われる。また、「*ul*」格の有無のみを、動詞の自・他を区別する唯一の決め手とするのは問題があるのではなかろうか<sup>7) 8)</sup>。本節では、この問題について深く立ち入る余裕はないが、ただ一つだけ指摘しておきたい。動詞の自・他の区別

は、単に形態のレベルでの問題ではなく、構文論上、重要な役割を果たしており、他動性(transitivity)の強弱によって意味上の目的語を要求する他動詞と自動詞に分類できると考えており<sup>9)</sup>、これについては、稿を改めて取り上げていきたい。

## 2.4 「ul」の強調的意味

この節では、「ul」の強調的意味について確認しておく。一般に、「ul」格を名詞句（体言ないし動詞や形容詞の体言化形）に付与することで、述語との論理的な関係を表せるが、「ul」にはそれとは異なる環境にも付与し得る<sup>10)</sup>。たとえば、

- ①動詞／形容詞の語幹 + 「ci」 + 「ul」 + 否定形「anh-, mos-, mal-」
- ②動詞の連結形 + 「-a, -key, -ko」 + 「ul」 + 動詞／形容詞
- ③副詞 + 「ul」 + 動詞
- ④補助詞 + 「ul」 + 動詞

上記の四つの形式は<sup>11)</sup>、(6a)とは異なる環境に「ul」が存在していることがわかる。このような環境に現れる「ul」の意味について、以下、順に従って考察する。

- (6) a. 철수가 밥을 먹는다.  
 Chelswu-ka pap-ul mek-nun-ta  
 C.-NOM meal-ACC eat-PRES-DEC  
 チョルスが ご飯を 食べる。
- b. 친구가 집에 가지를 않는다.  
 chinkwu-ka cip-ey kaji-lul anh-nun-ta  
 friend-NOM house-DAT go-AUP not-PRES-DEC  
 友達が お家に 行か-を ない。
- c. 단풍이 예쁘지를 않다.  
 tanphwung-i yeppuci-lul anh-ta

red leaves-NOM beautiful-AUP not-DEC

紅葉が きれいではない。

先ず、「動詞／形容詞の語幹＋「*ci*」＋「*ul*」＋否定形「*anh-*, *mos-*, *mal-*」について考察する。上記の (6a) と (6b) (6c) の「*ul*」は、形態的には同形であるが、機能的には異なる働きをする、いわゆる「同形異機能助詞」とも言えるものであろう。先ず、(6a) の「*ul*」格名詞句は「食べる」という行為の直接対象を表しているが、(6b) (6c) の「*ul*」は「友達が家に帰らなければならないのに帰らない」「紅葉がきれいなはずなのにきれいではない」という話者の「ある状況に対する特別な態度や姿勢」を表している。すなわち、命題に対する話者の強調が投影されると考えられる。これは「*ul*」を介在しない (7a) (7b) と比べてみるとその違いは一目瞭然であろう。

- (7) a. 친구가 집에 가지 않는다.  
 chinkwu-ka cip-ey kaji-anh-nun-ta  
 friend-NOM house-DAT go-not-PRES-DEC  
 友達が お家に 行かない (帰らない)。
- b. 단풍이 예쁘지 않다.  
 tanphwung-i yeyppuci-anh-ta  
 red leaves-NOM beautiful-not-DEC  
 紅葉がきれいではない。

また、(8) のように、限定や対照を表す「*-ka/-nun*」との比較からも、「*ul*」の有する強調的意味は観察される。(次の文の「\*」は、パラフレーズされた文として不適格性を示す)

- (8) 친구가 집에 { a. 가지를  
 chinkwu-ka cip-ey { ka-ji-lul  
 { b. 가지가  
 { \*ka-ji-ka<sup>(2)</sup> } 않는다.  
 { c. 가지는 } anh-nun-ta  
 { ka-ji-nun



(9) 단풍이 tanphwung-i	{	a. 예쁘 <u>지</u> 를	}    많다. anh-ta
		yeppu-ci- <u>lul</u>	
		b. 예쁘 <u>지</u> 가	
		yeppu-ci- <u>ka</u>	
		c. 예쁘 <u>지</u> 는	
		yeppu-ci- <u>nun</u>	

(8c) (9c)の意味は、たとえば「友達が他のところには行くけど(或いは、他のことはやるけど)、お家には帰らない」「他のところは紅葉が綺麗だが、ここは綺麗ではない」という対照の意味解釈が可能であり、また、(9b)は「ka」の排他的性格により、紅葉の属性の内の一つである「綺麗」に焦点を当てるという「限定」の意味解釈が可能である。(8a) (9a)は、(9b)の限定の意味に類似しているが、「当然、～するはずなのに」という話し手の命題に対する強調的意味が含まれているという点で異なるのである。なお、このような形式は、四つの形式の中で、比較的に多く用いられる。

次に、「動詞の連結形+「-e/-a, -key, -ko」+「ul」+動詞／形容詞」の形式は、動詞の連結形「-e」または「-ko」の後に「ul」を付与することによって、表現を強調する意味が生ずると思われる。たとえば、次の(10a) (10b)は「ul」が付与されることによって強調表現となったものである。(10)は『標準国語大辞典』より)

- (10) a. 내    말도    좀    들어를    보세요.  
 nay   mal-to   com   tule-lul   po-seyo  
 my   say-too   a little   hear-AUP   try-please  
 私の 話も    ちょっと    聞いてを    見てください。
- b. 잊고를    싶어도…(省略)  
 ic-ko-lul    sipe-to…  
 forget-AUP   want-even if  
 忘れを    たいけど…

(11a) (11b)のような「副詞+ul+動詞」の形式は、「ppalli (はやく)」、「manhi (たくさん)」の副詞の機能を維持したまま「ul」が結合してい

る (Kim, Yongsek (1979))<sup>13)</sup>。「ul」が付与されることによって副詞が強調され、話者の表現に対する強調が投影されていると解釈できる。また、(11c) のような「補助詞 + ul + 動詞」の形式についても、同様のことがいえる。(引用するに当たり、内容に影響がない範囲で、成分を付け加えた)

- (11) a. 그 아이가 워낙 급히를 먹더군요. (Kim, Yongsek(1979: 47))  
 ku ai-ka wenak kuphi-lul mek-te-kwun-yo  
 The boy-NOM very hurry-AUP eat-PAS-EXC-FIP  
 その子が とても はやくを 食べていた。
- b. 그가 그렇게 많이를 먹을 수 있나요 (Kim, Yongsek(1979: 47))  
 ku-ka kulehkey manhi-lul mekul-swu-iss-na-yo  
 He-NOM so much house-AUP eat-can-PAS-EXC-FIP  
 彼가 そんなに たくさんを 食べられるの。
- c. 철수도 영수만큼을 공부했다. (Kim, Yongsek(1979: 49))  
 Chelswu-to yengswu-mankum-ul kongpwu-hayss-ta  
 C.-too Y.-or so-AUP study-PAS-DEC  
 チョルスも ヨンスほどを 勉強した。

(10) (11) は、(12) (13) の「ul」を伴わないものと比べてみるとわかるように、表現に特別な意味、すなわち、「強調的な意味」を持たせるために「ul」を付与したと考えられる。

- (12) a. 내 말도 좀 들어 보세요.  
 nay mal-to com tule po-seyo  
 私の 話も ちょっと 聞いて 見てください。
- b. 잊고 싶어도…  
 ic-ko sipe-to…  
 忘れ たいけど…
- (13) a. 그 아이가 워낙 급히 먹더군요.  
 ku ai-ka wenak kuphi mek-te-kwun  
 その子が とても はやく 食べていました。
- b. 그가 그렇게 많이 먹을 수 있나.  
 ku-ka kulehkey manhi mekul-swu-iss-na

彼が	そんなに	たくさん	食べられるの。
c. 칠수도	영수만큼		공부했다.
Chel-swu-to	yengswu-mankum	kongpwu-hayss-ta	
チョルスも	ヨンスほど		勉強した。

本節で考察した「強調的意味」を表す「ul」の特徴は、「それがなくとも文は文法的であり、かつ、自然な表現である」(奥田 (1979: 20)) という点である。なぜならば、この「ul」は話者が特定の意味を持たせるために付与したといえるからである。このような、「ul」の補助詞の用法は「脱範疇化(decategorization)現象」<sup>14)</sup>によって説明できる。すなわち、希薄化(bleaching)により「ul」の元来持っていた格助詞のカテゴリーの帰属度が徐々に薄れ分化し、補助詞のカテゴリーに属するようになったと考えられる。

今までの考察で、「ul」は格助詞と副助詞の用法をもつ「同形異機能助詞」であることが明らかになった。図示すると、

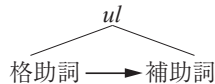


figure1

のようになる。しかし、脱範疇化現象を意味の拡張として捉えるか、意味の消失として捉えるかは、現段階では分からず、今後の課題とする所以である。

### 3. 「ul」格名詞句重出をめぐる諸説

本節では、韓国語の「ul」格名詞句重出構文に関する従来の研究を概観する。韓国語は「表層において一つの動詞が二つ「ul」格を要求することが可能である」という前提で、研究が進んでおり、代表的な研究としては、*Im, Hongpin* (1980/1998), *I, Kwangho* (1988), *Se, Cengswu* (1996a),

Seng, Kwangswu (1974/1999)などが挙げられる<sup>15)</sup>。

Se, Cengswu (1996a)と Seng, Kwangswu (1974/1999)は、「ul」格名詞句重出構文を次の五つのタイプ分類しており、その方法も微細な点では相違のあるものの、全体の傾向としては互いに似ているところが多い。そこで、本稿では、韓国でもっともよく取り上げられるSe, Cengswu (1996a: 599- 604)の研究を中心に若干の考察を行う。Se, Cengswu によると、

- [1] 대소 관계 유형 [大小關係類型]
- [2] 부사어 대치 유형 [副詞語代置類型]
- [3] 수량어 관계 유형 [數量詞關係類型]
- [4] 여격 유형 [与格類型]
- [5] “하다” 관련 유형과 동족 목적어 유형 [“hata”關連類型及び同族目的語類型]

の五つに分類されており、韓国語の「ul」格名詞句重出構文についての観点は非常に多様であることが見て取れる。以下、上記の五つの分類を順に概観する。

[1] 「大小關係類型」とは、(14a) のように「[NP<sub>1</sub>-ul] (以下、「一次的対格」と記す)と「[NP<sub>2</sub>-ul] (以下、「二次的対格」と記す)が「全体」(ヨンヒ)と「部分」(背中)のような「不可讓渡性(inalienability)」を持って結合する密接な関係を示すタイプ」であり<sup>16)</sup>、なお、このタイプは (14b) のように一次的対格を属格「uy」に置換可能である。(用例を引用するに当たり、内容に影響のない範囲で、成分を変えたり、省略したりした。他の論文から引用したものもある。なお、再掲の場合、形態素単位と日本語訳は省く。以下同様)

(14) a.	철수가	영회를	등을	때렸다.	(2b) 再掲)
	Chelswu-ka	Yenghuy-lul	tung-ul	ttayli-ess-ta	
		NP <sub>1</sub>	NP <sub>2</sub>		

- b. 철수가 영희의 등을 때렸다.  
 Chelswu-ka Yenghuy-uy tung-ul ttayli-ess-ta  
 Y.-GEN  
 チョルスが<sup>が</sup> ヨンヒの 背中を ぶった。
- (15) a. 아이가 고양이를 꼬리를 잡았다. (Seng, Kwangswu (1981: 115))  
 ai-ka koyangi-lul kkoli-lul cap-ass-ta  
 child-NOM cat-ACC tail-ACC catch-PAS-DEC  
 子どもが 猫を しっぽを つかんだ。
- b. 아이가 고양이의 꼬리를 잡았다.  
 ai-ka koyangi-uy kkoli-lul cap-ass-ta  
 cat-GEN  
 子どもが 猫の しっぽを つかんだ。

〔2〕副詞語代置類型は、「二次的対格が副詞語(Adverbial)に置き換えられたもの」で<sup>17)</sup>、副詞語は日本語の副次補語(寺村(1982))に相当すると考えられる。このタイプは、(16b) (17b) のように二次的対格が具格「*lo*」に置換可能である<sup>18)</sup>。

- (16) a. 철수가 영희를 아내를 삼았다.  
 Chelswu-ka Yenghuy-lul anay-lul sam-ass-ta  
 C.-NOM Y.-ACC wife-ACC make-PAS-DEC  
 チョルスが<sup>が</sup> 영희를 아내를 삼았다。
- b. 철수가 영희를 아내로 삼았다.  
 Chelswu-ka Yenghuy-lul anay-lo sam-ass-ta  
 wife-INST  
 チョルスが<sup>が</sup> 영희를 아내에 삼았다。
- (17) a. 철수는 포도를 술을 만들었다.  
 Chelswu-nun photo-lul swul-ul mantul-ess-ta  
 C.-TOP grape-ACC drink-ACC make-PAS-DEC  
 チョルスは 葡萄を 酒を 作った。
- b. 철수는 포도를 술로 만들었다.  
 Chelswu-nun photo-lul swul-lo mantul-ess-ta  
 drink-INST  
 チョルスは 葡萄を お酒に 作った。

なお, 上記の(17a)のように, 一次的対格が無情物を表す名詞の場合は,

次の(18)のような置き換えも可能である。(17b)の具格「*lo*」は、生産物を表しており、(18)では材料を表している<sup>19)</sup>。

(18) 철수는	포도로	술을	만들었다.
Chelswu-nun	photo- <u>lo</u>	swul-ul	mantul-ess-ta
	grape- INST		
チョルスは	葡萄で	お酒を	作った。

〔3〕数量詞関係類型は、(19a)のように「分量や時間を表す数量詞(quantifier)が二次的対格になるタイプ」である<sup>20)</sup>。また、片方の「*ul*」格を省略することも可能である<sup>21)</sup>。

(19) a.	철수가	물고기를	열	마리를	잡았다.
	Chelswu-ka	mwulkoki- <u>lul</u>	yel	mali- <u>lul</u>	cap-ass-ta
	C.-NOM	fish-ACC	ten	CLA-ACC	get-PAS-DEC
	チョルスが	魚を	十	匹を	捕った。
b.	철수가	물고기를	열	마리- $\phi$	잡았다.
	Chelswu-ka	mwulkoki- <u>lul</u>	yel	mali	cap-ass-ta
	チョルスが	魚を	十	匹	捕った。
c.	철수가	물고기- $\phi$	열	마리를	잡았다.
	Chelswu-ka	mwulkoki	yel	mali- <u>lul</u>	cap-ass-ta
	チョルスが	魚	十	匹を	捕った。

〔4〕与格類型は、「授与動詞「*cwuta*」と(あげる/くれる)共起する与格の「*-eykey*」が「*ul*」格に置き換えられるタイプ」である<sup>22)</sup>。

(20) a.	어머니가	아이를	밥을	주었다.
	emeni-ka	ai- <u>lul</u>	pap- <u>ul</u>	cwu-ess-ta
	mother-NOM	child-ACC	rice-ACC	give-PAS-DEC
	お母さんが	子どもを	ご飯を	あげた。
b.	어머니가	아이에게	밥을	주었다.
	emeni-ka	ai- <u>eykey</u>	pap- <u>ul</u>	cwu-ess-ta
		child-DAT		
	お母さんが	子どもに	ご飯を	あげた。

- (21) a. 철수가 어머니를 용돈을 드렸다.  
 Chelswu-ka emeni-lul yongton-ul tuli-ess-ta  
 C.-NOM mother-ACC pocket mone-ACC give-PAS-DEC  
 チョルスが お母さんを お小遣いを あげた。
- b. 철수가 어머니에게 용돈을 드렸다.  
 Chelswu-ka emeni-eykey yongton-ul tuli-ess-ta.  
 mother-DAT  
 チョルス가 お母さんに お小遣いを あげた。

〔5〕“hata”関連類型及び同族目的語類型とは、「“hata”（日本語のサ変動詞に対応する）が「*ul*」格を取るタイプ」（22a）と「〔同族目的語〕<sup>23)</sup>を取るタイプ」（23a）である。このタイプは、(22b) (23b) のように二次的対格の省略が可能である。

- (22) a. 철수가 수학을 공부할 한다.  
 Chelswu-ka swuhak-ul kongpwu-lul ha-n-ta  
 C.-NOM mathematics-ACC study-ACC do-PRES-DEC  
 チョルス가 数学を 勉強を する。
- b. 철수가 수학을 공부한다.  
 Chelswu-ka swuhak-ul kongpwuha-n-ta  
 study-PRES-DEC  
 チョルス가 数学を 勉強する。
- (23) a. 영희가 여류비행사를 꿈을 꾸었다.  
 Yenghuy-ka yelyupihayngsa-lul kkwum-ul kkwum-ess-ta  
 Y.-NOM aviatrix-ACC dream-ACC dream-PAS-DEC  
 ヨンヒ가 女性飛行士を 夢を 見た。
- b. 영희가 여류비행사를 꿈꾸었다.  
 Yenghuy-ka yelyupihayngsa-lul kkwumkkwu-ess-ta  
 Y.-NOM aviatrix-ACC dream-PAS-DEC  
 ヨンヒ가 女性飛行士を 夢見た。

以上, *Se, Cengswu* (1996a) による五つの分類について概観した。2.2節で確認した目的語の定義に従うならば、上記の二重対格構文は真性目的語と擬似目的語とが重出した構文であり、真性目的語の重出ではない

ということになる（以下、擬似目的語が含まれる構文を「擬似対格重出構文」と呼ぶことにし、真性目的語が重出する構文を「真性対格重出構文」と呼ぶことにする）。すなわち、*Se, Cengswu*は、韓国語では同一単文中に真性対格重出構文は許されず、「ul」格が重出していても、片方が他の助詞に置換可能な擬似対格重出構文のみが許されるということを指摘している<sup>24)</sup>。学校文法によると、五つの分類はすべて真性二重対格構文となる。以下では、この擬似対格重出構文を取り上げ、文法性判断の事実関係について考察することにする。

#### 4. アンケート調査

擬似対格重出構文の文法性判断について、一個人の表現理解行為といったその折々の言語行為を問題とするだけでは不十分で、一般性を導入する必要があると考えたため、韓国語母語話者の内省・直感を問うアンケート調査を行った。被験者は、韓国語母語話者（大学生・院生・大学や専門学校で韓国語を教えている非常勤講師）17人である。なお、被験者の詳細な情報を〈表1〉にまとめたので、参照されたい。

〈表1〉被験者情報（○：女性，●：男性。忠：忠清北道，濟：濟州道）

被験者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q
40代							●										
30代				●	○	●					○	●		●			●
20代	○	●	○					○	●	●			●		●	●	
年齢											忠	慶尙北道		慶尙南道		濟	
地域	ソウル								京畿道		忠	慶尙北道		慶尙南道		濟	

*Se, Cengswu* (1996a) の五つの分類に基づき、二種類のアンケート調査を行った。

まず、アンケート1では、擬似対格重出構文を中心に（若干変形を加えたものもある）、さらに用例を加え、助詞のところを空欄にして、たとえば、





「*ul*」格の重出は見られず、同一単文中では、一つの名詞句は基本的にどれか一つの格形式を選んで現れるという結果が得られ、「一文一格の原理」<sup>25)</sup>は守られていることが確認された。また、アンケート2では、すべての用例について許容度は低いという結果が得られた<sup>26)</sup>。以下では、これらの結果を取り上げつつ、擬似対格重出構文についてより詳しく考察することにする。

## 5. 擬似対格重出構文の事実関係の再考

本節では、*Se, Cengswu* (1996a) の五つの擬似対格重出構文をめぐる諸説やアンケートによる許容度の結果について確認する。なお、韓国語と同じく後置式の言語である日本語の二重ヲ格構文の文法性についても若干触れつつ、考察を進めることにする。

### 5.1 大小関係類型

大小関係類型は、表面上、二つの名詞句が生起しているように見える。しかし、(24) の「*ttaylita*」(ぶつ) や (25) 「*capta*」(掴む) などは、一般に目的語を一つのみ必要とする動詞であり、意味的に考えた場合、「*ul*」格が現れる名詞句全体を一つの名詞句として捉えられるのではなかろうか。

- |         |            |                     |                   |               |           |
|---------|------------|---------------------|-------------------|---------------|-----------|
| (24) a. | 철수가        | 영회를                 | 등을                | 때렸다.          | ((14) 再掲) |
|         | Chelswu-ka | Yenghuy- <u>lul</u> | tung- <u>ul</u>   | ttayli-ess-ta |           |
| (25) b. | 아이가        | 고양이를                | 꼬리를               | 잡았다.          | ((15) 再掲) |
|         | ai-ka      | koyangi- <u>lul</u> | kkoli- <u>lul</u> | cap-ass-ta    |           |

上記の用例について、アンケート1では、先ず(24)は「FN=*uy*, SN=*ul*」の答えが17人から得られた。次に(25)は「FN=*uy*, SN=*ul*」の答えが13人、「FN= $\phi$ , SN=*ul*」の答えが4人という結果が得られ、少数ではあるものの、FNとSNをいわゆる複合語(*complex word*)として捉

えていることも確認された。

一つの名詞句は一般に一つの格形式を選んで現れる。大小関係類型は、「焦点連鎖」(focus chains)の推移により、動作主の行為が及ぶ範囲が限定され、その部分が強調された描き出しになると考えられる。

例えば、(figure 2の矢印は「大→小」への焦点推移, ○は「ul」格の付与, ⊙は格の交替, ⊖は言語上に現れないことを意味する)

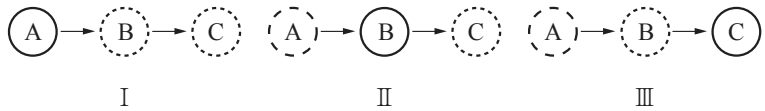


figure2

のように、行為の及ぶ対象「A」において目的語標識「ul」の付与を許せば、「B」の段階は言語上には現れず「I」、焦点推移によって動詞の行為がより限定される「B」の段階で「ul」の付与を許せば、左側「A」は属格に変化、つまり、格の交替が行われる「II」という規則があるように思われる。また、「大→小」の推移において、認知の領域内に存在するが、言語の経済性によって言語上には現れない場合もある「III」。大小関係類型と関連し、動作主の行為により、「ul」格名詞句の表す指示物が行為の直接的な影響を受けると解釈可能な場合のみ「ul」格標示が許されるという「影響性制約」(Affectedness Condition)が働いているという指摘もある(Cho, Dongin (1993))。影響性制約とは、大雑把に言えば、「ttaylita」や「capta」などの動作は対象に直接的に影響を与えるため、「ul」格名詞句の重出が許されるが、(24)の「보다(pota)」(見る)のような知覚動詞は、動作による対象への影響性が弱いいため、「ul」格名詞句の重出が許されないということである。

(26) \*칠수가 영희를 손을 보았다.

Chelswu-ka Yenghuy-lul son-ul po-ass-ta  
 C-NOM Y.-ACC hand-ACC look at-PAS-DEC  
 チョルスが ヨンヒを 手を 見た。

しかし、〈表2〉に示したように、大小関係類型についての母語話者の許容度は非常に低く、また、Cho, Dongin (1993) では、非文と判断される(26)との許容度についてもさほどの相違はないため、「影響性制約」については検討の余地があるように思われる。ちなみに、日本語では、「花子の顔を殴る」のように動詞に関係する名詞を一つだけヲ格で表すことはできるが、「\*花子を顔を殴る」のように二つを同時にヲ格で表すことはできず、すなわち、二重ヲ格は許されないとされている(益岡(1987))。

〈表2〉 大小関係類型の許容度

被験者 用例	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	平均
(24)	0	1	0	0	1	0	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0.35
(25)	1	1	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	1	2	0	0	0.53
(26)	0	1	0	0	0	0	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0.41

## 5.2 副詞語代置類型

副詞語代置類型について、I, Hongsik (2000: 179) は、一次的対格と二次的対格とが述語「samta」(…にする)と直接的な関係を結んでいるため、真性擬似対格構文であると述べている。しかし、(27a)の文を構成している要素を省略してみると、たとえば、(27b)では「誰を」という要素、(27c)「何に」という要素が欠けており、文として不完全であることがわかる。また、(27d)との関連において具体的な説明ができないという矛盾が生ずる。

- (27) a. 철수가 영희를 아내를 삼았다. ((16)再掲)  
 Chelswu-ka Yenghuy-lul anay-lul sam-ass-ta  
 b. \*철수가 ϕ 아내를 삼았다.  
 Chelswu-ka anay-lul sam-ass-ta

- c. \*철수가 영화를  $\phi$  삼았다.  
 Chelswu-ka Yenghuy-lul sam-ass-ta.
- d. 철수가 영화를 아내로 삼았다.  
 Chelswu-ka Yenghuy-lul anay-lo sam-ass-ta.

(28) 철수가 포도를 술을 만들었다. ((17) 再掲)

- Chelswu-nun photo-lul swul-ul mantul-ess-ta  
 チョルスは 葡萄を 酒を 作った。

(29) 그가 통나무를 의자를 만들었다. ((3) 再掲)

- ku-ka tongnamwu-lul uyca-lul mantul-ess-ta  
 彼가 丸太を 椅子を 作った。

上記の用例が文法的に正しいならば、一次的対格は材料（対象）を表し、二次的対格は目的ないし結果を表すことになる。確かに、「ul」格名詞句は単独なら、「ttang-ul phata」（土を掘る）のように、動詞の行為を受ける「対象」を表したり、「kwumeng-ul phata」（穴を掘る）のように、動詞の行為により生起する「結果」を表したりする。しかし、たとえば「対象」と「結果」とを表す「ul」格が重出するような場合、代替の形が存在する方を交替させることによって重出は回避される。このようなことは、アンケート1からも確認できる。まず(27a)は「FN=ul, SN=lo」の答えが14人, 「FN= $\phi$ , SN=ul」の答えが3人, 次に(28)は「FN=lo, SN=ul」の答えが16人, 「FN=ul, SN=lo」が1人, 最後に(29)は「FN=lo, SN=ul」の答えが9人, 「FN= $\phi$ , SN=ul」の答えが7人, 「FN=ul, SN=lo」の答えが1人という結果が得られた。なお、副詞語代置類型の用例について、アンケート2の結果は次のようである。

〈表3〉副詞語代置類型の許容度

用例	被験者																	平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	
(27)	2	1	0	1	1	1	3	1	0	1	2	0	3	2	1	0	0	1.12
(28)	1	1	1	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0.59
(29)	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.12

### 5.3 数量詞関係類型

数量詞は数詞に助数詞（名詞の意味的分類）が続くものを指し、意味的な観点から、

- ① 主体の量
- ② 動作の直接対象の量
- ③ 動作の移動する空間の量・程度
- ④ 動作の持続する時間の量・程度
- ⑤ 動作の反復される量・回数

の五つに分類できるが、韓国語の数量詞は、日本語とは異なって「名詞の直後に置かれるのが一般的」<sup>27)</sup>であり、意味的には直前の名詞を修飾するものの、統語的には連用修飾句となる特徴がある。また、他の単語に対する積極的な関係を示さず、動作の対象を数量的に限定することによって、動詞の表す動き・状態・性質の量や程度をより具体的に表す働きをする。

数量詞関係類型は、「yel mali」（十匹）という付加語(Adjunct)に主眼を置くタイプである。すなわち、(30b)は数量詞が省略されても文として成立するが、(30c)「何を」という要素が欠けており、文として不完全である。

- |         |            |                      |     |                  |            |         |
|---------|------------|----------------------|-----|------------------|------------|---------|
| (30) a. | 철수가        | 물고기를                 | 열   | 마리를              | 잡았다.       | (19) 再掲 |
|         | Chelswu-ka | mwulkoki- <u>lul</u> | yel | mali- <u>lul</u> | cap-ass-ta |         |
| b.      | 철수가        | 물고기를                 |     | φ                | 잡았다.       |         |
|         | Chelswu-ka | mwulkoki- <u>lul</u> |     |                  | cap-ass-ta |         |
| c.      | *철수가       | φ                    | 열   | 마리               | 잡았다.       |         |
|         | Chelswu-ka |                      | yel | mali- <u>lul</u> | cap-ass-ta |         |

また、(30a)の構成要素を倒置するテスト、すなわち(31a)のような主題化(topicalization)と(31b)のような分裂文(cleft sentence)にすることによって、数量詞は動詞「capta」（捕る）の目的語ではないことが

容易に確認できる。

- (31) a. \*열 마리는 철수가 물고기를 잡았다.  
 yel mali-nun Chelswu-ka mwulkoki-lul cap-ass-ta.  
 ten CLA-TOP C.-NOM fish-ACC get-PAS-DEC  
 十匹は チョルスが 魚を 捕った。
- b. \*철수가 물고기를 잡는 것은 열 마리다.  
 Chelswu-ka mwulkoki-lul cap-un kes-un yel mali -ita.  
 C.-NOM fish-ACC get-PAS FN-TOP ten CLA-DEC  
 チョルス가 魚을 捕った のは 十匹だ。

(32a) (32b) を見てわかるように、名詞句と数量詞が共起する場合、片方をゼロ格にした方がより自然な表現となるため、ゼロ格の存在を考慮しなければならない。また、ゼロ格についてはアンケート 1 から確認され、「FN= $\phi$ , SN=*ul*」の答えが10人、「FN= *ul*, SN= $\phi$ 」の答えが7人という結果が得られた。これは、「*ul*」格の重出を回避しようとする働きにより生ずると考えられる。

- (32) a. 철수가 물고기를 열 마리- $\phi$  잡았다.  
 Chelswu-ka mwulkoki-lul yel mali cap-ass-ta
- b. 철수가 물고기- $\phi$  열 마리를 잡았다.  
 Chelswu-ka mwulkoki yel mali-lul cap-ass-ta

〈表4〉副詞語代置類型の許容度

被験者 用例	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	平均
(30)	3	2	1	3	2	3	2	0	1	3	1	0	1	2	0	1	2	1.59

## 5.4 与格類型

与格類型は<sup>28)</sup>、三つの項を要求する動詞の中でも、授与動詞「*cwuta*」(あげる : give) や「*kaluchita*」(教える) に限定されており、同じく三つの項を要求する「*nayta*」(出す), 「*ponayta*」(送る)などは「*ul*」格名詞句が重出すると非文となる (*Se, Cengswu* (1996a: 700))。しかし、「*cwuta*」や「*kaluchita*」のみが「*ul*」格名詞句の重出を許すという制約について

は少し疑問が残る。また、授与動詞「cwuta」は、送り手の視点から受け手にもものが移動することを表すが、韓国語には受け手の視点からものの移動を表す「patta」(もらう: receive) も存在する。授受動詞「cwuta」に限定するならば、当然、(34) のような視点の相違による逆意関係にある「patta」についても同様の解釈が可能になるのではないかと考えるのが一般的であろうが、そのような記述は見当たらない。((34) は筆者による判断)

- (33) 어머니가 아이를 밥을 주었다. (20) 再掲  
 emeni-ka ai-lul pap-ul cwu-ess-ta.
- (34) \*철수가 어머니를 용돈을 받았다.  
 Chelswu-ka emeni-lul yongton-ul pat-ass-ta.  
 C.-NOM mother-ACC pocket mone-ACC receive-PAS-DEC  
 チョルスが お母さんを お小遣いを もらった。

このような動詞の制約について、与格類型においても「影響性制約」が働いており、「[cwuta]の方が〈着点〉が被る影響力が「ponayta」より強く、したがって対格標示が許される」(金榮敏(2002: 18)) という興味深い見解もある。しかし、その影響力を判断する基準が抽象的であり、影響力の強弱について峻別できるとは言えず、影響力がどの程度強ければ対格標示が許されるかという点については言及されていない。また、〈表5〉を見るとわかるように、与格類型の擬似二重対格構文についての許容度も低いいため、現段階では「影響性制約」を援用することができない。仮に、与格類型の擬似二重対格構文を認め、影響力の強弱によって説明が可能であるならば、影響力の強弱を判断する基準やどのような原理が働いているかについて、より厳密な検討が必要であろう。

アンケート1では、両方とも「FN=*eykey*, SN=*ul*」の答えが17人という結果が得られ、アンケート2による許容度は次のようである。



〈表5〉副詞語代置類型の許容度

用例	被験者																平均	
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P		Q
(33)	3	1	0	0	0	2	2	0	0	1	1	0	0	2	0	0	2	0.82
(34)	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0.18

## 5.5 “hata”関連類型及び同族目的語類型

### 5.5.1 “hata”関連類型

言語は、恒常不変のものではなく、絶えず変化する。例えば、「kongpwu-hata」（勉強をする）の場合（「kongpwu」を「Y」と記す）、通時的に「Y-ul hata」から「ul」の脱落によって「Y-hata」が形成されたと考えられる（Song, Changsen (2009)）。「Y-ul hata」の「hata」は他動詞であるが、「Y-hata」の「hata」は接尾辞であるため、「Y」と「hata」とに分離することはできず、「Y-hata」全体を一つの他動詞として認めなければならない。つまり、両方の「hata」は異質のものである。(35)は、「swuhak」を「X」と記す）

(35) 철수가

수학을

↓

X

Chelswu-ka

공부를

↓

Y

kongpwu-lul

한다.

ha-n-ta

(22) 再掲

従来の研究によると、「Y-ul」のみが動詞「hata」に呼応し、「X-ul」は「Y-ul hata」に呼応する。すなわち、先ず、「hata」（する）が目的語として「Y」を取り、「Y-ul hata」（勉強をする）の動詞句が目的語として「X」を取るという二重構造になっているため、他の擬似二重対格構文とは構造が異なると述べられている<sup>29)</sup>。ちなみに、上記のような構造は、日本語では許されない（新屋（1995））。

しかし、上記の構文について、二つの構造が考えられる。一つは、自立名詞同士の連結において属格が脱落する現象が多々生ずる韓国語の事情から、「XY」を複合語(complex word)と捉え、「hata」が目的語として「XY」

を取るという構造である。この場合「X」は後続する「Y」を限定する働きをする。もう一つは、すでに若干触れたように、「Y」と「hata」を一つの動詞として捉え、「Y-hata」が目的語として「X」を取るという構造である。

なお、アンケート1からも、二つの構造のみが確認され、「FN：φ，SN：ul」の答えが15人、「FN：ul，SN：φ」の答えが2人という結果が得られた。このような現象には、言語の伝達行為において、可能な限り労力を最小化し、情報を最大化しようとする「言語の経済性」(economy in language)の原理が深く関与しているであろう。アンケート2による許容度は次のようである。

〈表6〉“hata”類型の許容度

被験者 用例	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	平均
(30)	3	2	0	1	1	4	3	2	1	3	1	0	1	2	2	1	2	1.71

### 5.5.1 同族目的語類型

同族目的語(cognate object)は、単に動詞の名詞形で、動詞を修飾する働きをするものである。韓国語における同族目的語構文は、「ul」の脱落可否や動詞に融合可否によってそれぞれ二つのタイプに分類できる。

〈表7〉同族目的語構文の分類

	同族目的語構文	意味	「ul」の脱落の可否	融合の可否
①	꿈을 꾸다(kkwum- <u>ul</u> kkwuta)	夢をみる	꿈꾸다(kkwum-kkwuta)	*꾸다(kkwuta)
②	춤을 추다(chwum- <u>ul</u> chwu-ta)	踊りを踊る	춤추다(chwum-chwuta)	*추다(chwuta)
③	걸음을 걷다(kelum- <u>ul</u> ketta)	歩きを歩く	*걸음걷다(kelum-ketta)	걷다(ketta)
④	웃음을 웃다(wusum- <u>ul</u> wusta)	笑いを笑う	*웃음웃다(wusum-wusta)	웃다(wusta)

すなわち、(36a)のように「ul」が脱落しても二つの要素が自然な形で結合可能なタイプ(①～②)と、そうでないタイプ(③～④)がある。また、同族目的語が動詞に融合可能なタイプ(③～④)と、(36b)のように融合できないタイプ(①～②)とに分かれる。

- (36) a. 영화가 여류비행사를 꿈꾸었다. ((23b) 再掲)  
 Yenghuy-ka yelyupihayngsa-lul kkwum-kkwu-ess-ta
- b. \*영화가 여류비행사를  $\phi$  꾸었다.  
 Yenghuy-ka yelyupihayngsa-lul kkwu-ess-ta

Se, Cengswu (1996a) は, ①~②のようなタイプについて「同族目的語の「ul」は任意に付与するいわゆる文体的形式要素」(p. 701)であると述べ, (37) の「kkwum」は真性目的語ではなく, 「yelyupihayngsa」のみが真性目的語である。そのため, 擬似二重対格構文であると指摘している。

- (37) 영화가 여류비행사를 꿈을 꾸었다. ((23a) 再掲)  
 Yenghuy-ka yelyupihayngsa-lul kkwum-ul kkwu-ess-ta

既に触れたように (37) は (36a) にすることも可能であるが, (38) のような解釈も可能である。すなわち, (37) の「kkwum」に「ul」を付与した場合, 「yelyupihayngsa」は属格「uy」に交替され, その内容をより具体的に描写する修飾語の働きをするという構造である。

- (38) 영화가 여류비행사의 꿈을 꾸었다.  
 Yenghuy-ka yelyupihayngsa-uy kkwum-ul kkwu-ess-ta  
 Y.-NOM aviatress-GEN dream-ACC dream-PAS-DEC  
 ヨンヒ가 女性飛行士の 夢を 見た。

このような解釈の方がより妥当であるが, いずれにしても「ul」格の重出は回避される。アンケート 2 では, 「FN=*uy*, SN=*ul*」の答えが15人, 「FN=*ul*, SN= $\phi$ 」の答えが2人という結果が得られた。

〈表8〉同族目的語類型の許容度

被験者 用例	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	平均
	(37)	0	1	1	0	1	2	3	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1

## 5.6 まとめ

今までの考察を簡単にまとめておく。アンケート 1 結果から, 一つの事象を組み立てる際には, 可能な限り同一の助詞の使用を回避しようと

する配慮により、同じ格助詞を伴わないことが確認できた。すなわち、従来の研究のように同形の助詞が重出するような場合は、一方を省略したり、どちらかを代替の形にしたりするという再調整が行われるということである。

ここで注意すべきことは、「ul」格名詞句の重出現象は「口語的に現れる現象」<sup>30)</sup>であるという点である。書き言葉の場合、文の構造は一般的な規則に従ったものが多く、助詞の省略は殆どない、また、書き手からの一方的な発信であるため、書き手は伝えたいことを的確に表さなければならないという一連の規則があるため、より自然で的確な助詞を使用しようとする話者の心理的な働きによって、その他の助詞はブロックされる<sup>31)</sup>。たとえば、

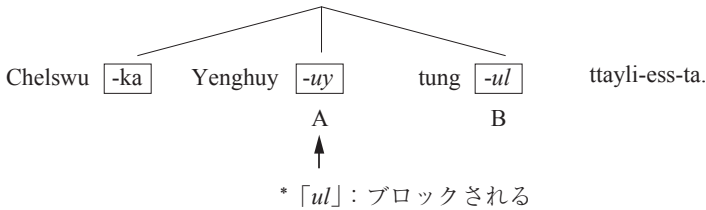


figure3

のように、slot「B」に「ul」が入ることによって助詞の再調整が行われると同時にslot「A」にすでに属格「uy」が存在しているので、「ul」はブロックされるということになる。

すでに触れたように、「ul」格名詞句の重出現象が口語的に現れるならば、どのような原理が働いているのであろうか。この点について若干述べておく。我々は一定の規則に従って文を組み立て、発話を生み出す。その際、絶えず確認と修正の作業が行われ、言語の流れに話し手の思考が反映される。ブロッキング現象や言語の経済性に反してまで「ul」格名詞句の重出現象が生起するならば、その理由として、他の方法では得られない新たな効果もたらされるということが考えられる。この点と

関連してI, Kwankyu (2002) に興味深い記述がある。つまり、「[ul]」が繰り返し現れるのは、ある対象を特に「強調」しようとする意図から生起する」(p. 244)と述べられており<sup>32)</sup>、言外の要素（ポーズ、プロミネンス）を伴わずに<sup>33)</sup>、その効果が得られることを示唆している。それによると、「ul」格名詞句重出構文の一次的対格と二次的対格とのいずれかは「強調」の意味を有するという解釈が可能になる。それが正しいとするならば、格助詞「ul」についてさらに付け加えなければならない意味がある。2.4節では「ul」格を機能的な観点から、「格助詞」から「補助詞」への転化について言及し、「同形異機能助詞」と呼ぶことにした。ここでの考察によると、補助詞用法（強調的意味）は名詞句以外の環境で生起するものであったが、もし、名詞句と共起する「ul」にも「強調的意味」が含意されるならば、「ul」格名詞句重出構文は補助詞用法の表す「強調的意味」が格助詞用法に逆行し、「強調的意味」が取り込まれたという発想が必要となるだろう。上記の記述を踏まえて考えてみると、figure 1は、次のように修正できる。

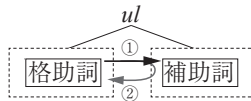


figure4

但し、以上のような考察は、あくまでもI, Kwankyu (2002) の見解をそのまま受け入れた場合の解釈であり、仮にそれが正しいとするならば、上記の現象は、言語の創造力(creativity)が生み出す動的な意味変化のしくみが働いていると考えられる。

本稿では、紙幅の制約もあり取り上げることができなかったが、移動経路や状況を表す「ul」格と直接対象を表す「ul」格との組み合わせ、格助詞と補助詞との組み合わせなどは可能であると考えており、この点については今後の課題としたい。

## むすび

言語は、話者の事態に対する認識を反映するものであるから、一般に表層構造(surface structure)で考察可能であるが、格助詞について考察する際には、表層格(形態)と深層格(意味)の二つのレベルを想定し区別しておいて、各レベルで何が問題となるのかについて明確にする必要がある。そのため、従来の研究では、基底構造(base structure=深層構造(deep structure))を想定し、そこまで遡り、表層構造に現れる構文との比較を通じ、分析する試みが行われてきたと思われる。しかし、我々がある事態を言語化し表現する際に、異なる助詞を用いるとより自然な表現が可能であるのに、はじめにわざわざ基底構造を考え、同レベルの「ul」格が重出する文を作るであろうか。ごく素朴な意識に則って人間の言語を獲得・生産する過程を考えた場合、それには若干疑問が残る。さらに、仮にそのような方法により、「ul」格名詞句重出構文の許容度をめぐる言語事実(従来の指摘と母語話者の直感・内省による判断の相違)についての具体的な説明が可能ならば、それはそれで意義のあることであるが、管見の限り、そのような記述は見当たらない。

事態をことばで切り取って、それに助詞を付与する際、我々は表面的なところで判断し、より簡潔かつ自然な形で文を組み立てるであろう。異なる構造を考えずに、表層の構造における話者の判断に積極的な意味を認め、従来、比較的に自由であると言われてきた同一単文中の「ul」格名詞句の重出現象について、その事実関係を考える。という視点に立つて、文の意味構造を分析していくことは意義のあることではなかろうか。本稿は、このような認識に立って共時的な観点から五つの「ul」格名詞句重出構文について考察を行った。

従来、自由であると言われてきた「ul」格名詞句重出構文について、韓国語母語話者を対象にしたアンケート調査結果をまとめておく。先ず、

アンケート1では、表層における助詞の再調整が行われ、「一文一格の原理」は守られていることが確認された。すなわち、「ul」格名詞句の重出を嫌うということである。次に、アンケート2では、文の許容度の判断結果を観察した場合、五つの類型についての許容度が低く、さらに不可能に近い文も確認された。その理由としてブロッキング現象や言語の経済性が考えられ、比較的に自由であると言われている韓国語の「ul」格名詞句重出構文について、さほど自由ではないということが言えるのではないか。しかし、韓国語において「ul」格名詞句重出構文は許容されるという従来の研究と「ul」格の重出を嫌う母語話者の判断との齟齬をどのように扱うか、また、「ul」格の重出について、どのような働きを持つものとして位置づければよいのであろうか、については、今後更なる検討が必要であろう。

また、本稿の考察によって、「ul」は脱範疇化現象によって格助詞用法（名詞句）と補助詞用法（名詞句以外）との両方の意味を有する同形異機能助詞であることが明らかになった。口語的に現れる「ul」格名詞句の重出現象が、ある特定の対象を「強調」しようとする意図から生ずるとするならば、補助詞用法から格助詞用法へと、強調的意味の逆行する現象であるということが考えられる。すなわち、口語的に現れる場合があり、その時の「ul」格の重出は「強調」の意味を含意するということが言えるのであろう。

本稿の議論では、「ul」格名詞句重出構文を口語的にのみ現れる現象であると述べたが、今後、自然談話のデータを積極的に考慮に入れて分析し直し、その妥当性を一層高めていきたい。

## 謝辞

本稿の執筆に際し、ご指導いただきました鷲尾龍一教授（学習院大学）、本研究の調査にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

## 注

- 1) 韓国語用例の表記は、Yale式ローマ字表記法を用いる。用例の日本語訳は直訳である（直訳の文に\*、?などの記号は付しない）。なお、各用例に形態素単位を付した。形態素単位は、次のような略号を用いる。

略号	形態素単位	略号	形態素単位
ACC	ACCUSATIVE 対格	FN	FORMAL NOUN 形式名詞
AUP	AUXILIARY PARTICLE 補助詞	INST	INSTRUMENTAL 具格
CLA	CLASSIFIER 類別詞、量詞	LOC	LOCATIVE 場所格
DAT	DATIVE 与格	NOM	NOMINATIVE 主格
DEC	DECLARATIVE 平叙文・平叙文語尾	PRES	PRESENT TENSE 現在時制
EXC	EXCLAMATIVE 感嘆文・感嘆文語尾	PAS	PAST TENSE 過去時制
GEN	GENITIVE 属格	SUB	SUBJUNCTIVE 接続詞
FIP	FINAL PARTICLE 終助詞	TOP	TOPIC 話題

- 2) 前接する名詞句が母音で終わる場合は「*ul* (*l*: 口語的)」を、子音で終わる場合は「*ul*」を用いる。
- 3) 現代日本語における二重ヲ格構文について、その認定の可否をめぐって否定的な立場と肯定的な立場とに分かれているようである。前者は杉本(1986)、益岡(1987)、新屋(1995)などがあり、後者は影山(1993)があるが、ここでは肯定的な立場を取る影山の記述を簡単に紹介しておく。影山は、日本語の二重ヲ格構文について、「おそらく書かれた文章には起こらないけれど、しかし非文法的な日本語として全面的に排斥するのは不当であると思われる」(pp. 316- 317)と述べ、「音声的なレベルでは適切さに欠けるが、統語的なレベルでは文法的に見なしてよい」(p. 317)と指摘している。次の例文は、影山(1993: 316)によるものである(文の適格性の判断は、同上書による)。

?\*百貨店が航空便で韓国から松茸を輸入をする。

さらに、「株を譲渡した側は、何らかの見返りを期待をして…(TVニュース1998/9)」という例文から「日本語においてもこの種のヲ格は日常の口語ではそう珍しくもなく観察される」(p. 317)と指摘している。

なお、日本語は「二重ヲ格」について現代語に限らず、古い時代の文献を調査し分析した研究も少なくない。例えば、佐佐木(2011)は、上代の文献『古事記』『日本書紀』『萬葉集』を調査し、二つの目的語が現れる構文



について分析している。

- 4)  $\phi$  は形式がないという意味である。
- 5) 教育人的資源部(2002a: 152- 153), 教育人的資源部(2002b: 191- 192)による。
- 6) 「ul」に関する名称は多様であり, 「pwulimcalito」・「pwulimcalissi」・「客語」・「対格」などがある。
- 7) 「ul」格の有無のみに依存し, 自動詞と他動詞とを区別することへの批判的な見解もある(*Yu, Hyenkyeng / I, Senhuy* (1996), *Ceng, Hucyeng* (1996) *Seng, Kwangswu* (2001))。なお, 国立国語院『標準国語大辞典』には, 動詞と形容詞については表示しているが, 動詞の自・他については表示していない。
- 8) 韓国語の動詞の自・他を区別する基準として, 「-e iss-」との結語可否による判別基準がある(*Im, Hongpin* (1976), *Song, Changsen* (2008b))。Im, Hongpinによると, 中世国語では, 「-e is-」は形容詞, 自動詞, 他動詞に結合可能であったが, 現代国語では, 他動詞, 形容詞は「-e iss-」との結合が許されず, すべての自動詞(限界動詞)は「-e iss-」と結合可能であるという統語的基準があると述べられている。
- 9) Hopper & Thompson (1980) によると, 他動性は10の段階によって規定されると述べられており, この点に関しては別稿に譲り, 機会を改めて考察したいと考えている。
- 10) Im, Hongpin (1972/1998, 1980/1998), I, Kwangho (1988), I, Namswun (1988) は, 対格ではない「ul」は「主題化標識」であると述べている。が, Kim, Kwihwa (1994) は「主題化」ではなく「焦点化」であると述べている。
- 11) 口語的によく用いられると考えられる。
- 12) 「-ka」は「動詞」と「否定詞」の間には介在不可能であるが, 「形容詞」と「否定詞」の間には介在可能である。
- 13) 副詞には「ul」が結合しても, 文法的かつ自然な表現になるものと, 非文法的なものがある(奥田(1979: 9))。詳しくは奥田(1979)を参照されたい。
- 14) 文法化現象における意味変化の方向性は, ある一定の方向に向かって起こる傾向があり, 逆行することはないという「方向性仮説(hypothesis of unidirectionality)」がある。これを支持する個別の言語現象として, 「意味の漂白化(semantic bleaching)」, 「脱範疇化(decategorization)」, 「語用論的強化(pragmatic strengthening)」の三つが指摘されている(河上(1996:181))。
- 15) 現行の学校文法では, 「一文中には目的語が一つあるのが原則であるが, 目的語が一つ以上用いられる場合もある」(教育部(1991: 75))と述べられており, 対格重出構文に対して肯定的な立場を取っている。
- 16) 原文は「두 목적격 명사구가 대개 “전체”와 “부분”의 대소 관계를 보이는

것」(p. 698)

- 17) 原文は「물체 명사구가 부사어로 바뀌는 것」(p. 699)
- 18) *Seng, Kwangswu* (1974/1999: 303) は、二次的対格の「*anay*」と「*swul*」とを「叙述目的語」と呼んでいるが、目的語と叙述目的語とを区別する基準についての明確な説明はなされていない。なお、文の主成分として「主語、目的語、補語、述語」(*I, Kwankyu* (2002: 230)) のみを認めている現時点において考えた場合、「叙述目的語」よりは「補語」や「必須副詞語」と呼ぶのが妥当であろう。
- 19) *Se, Cengswu* は、(18) と比べて見た場合、そのような解釈の可能性は希薄であり、また、本来の意味と異なると述べている。
- 20) 原文は「분량이나 시간 따위의 셈을 헤아리는 수량어(quantifier)가 둘째 목적격이 되는 것」(p. 699)
- 21) *Se, Cengswu* は、(10) のように置換可能であると述べているが、程度を表す「*mankum*」は「十匹」ではないという解釈も可能であり、両方には若干意味の差が生ずると考えられる。

(10)	c.	철수가	물고기를	열	마리만큼	잡았다.
		Chelswu-ka	mwulkoki-lul	yel	mali-makum	cap-ass-ta
		C.-NOM	fish-ACC	ten	CLA-or so	get-PAS-DEC
		チョルスが	魚を	十	匹ほど	捕った。

- 22) 原文は「“주다”와 같은 수여 동사가 쓰일 때에는 조사 “에게”로 이루어지는 여격(dative) 부사어가 나타나게 되는데, 이 “에게”가 {를}로 대치되어 겹목적격의 모습을 보인다」(p. 603)
- 23) 「同族目的語 (cognate objects)」とは、「to live a happy life, to die a tragic death」のように動詞と目的語が同系の語から成り立っている構文法」(秦 (2009: 145)) をいう。また、韓国語の同族目的語に関しては *Wu, Hyengsik* (1996: 247- 259) を参照されたい。
- 24) 従来の研究では、「*ul*」格名詞句重出現象が「擬似対格重出構文」か「真性対格重出構文」かの議論が多かった。
- 25) *Fillmore* (1971) は格の説明に当たって、一つの動詞は（並列の場合を除く）一つの格を一つしか取らないといっている。例えば「数学を勉強をする」とはいわない、ということである。これを「一文一格の原則」という。
- 26) ちなみに、筆者の感覚では (1) (2) (4) (5) は認めることができず、(3) はぎこちないが言えなくもない。
- 27) *Se, Cengswu* (1996a: 700)
- 28) 『朝鮮語大辞典』の用例にも見られる。
- 29) *Kim, Yenghuy* (1986) では、「*hata*」に関する議論を「語根仮説」、「主叙述語仮説」、「内部目的語仮説」、「下位叙述語仮説」の四つにまとめている。

- 30) *Seng, Kwangswu* (1990) は「目的語の重出現象は現代国語では主に口語に用いられる」(p. 39)と述べ、*I, Iksep* (2005) も「口語的な現象である」(p. 117)と述べている。
- 31) 「ブロッキング」とは、優位性の高い基本的な形態がslotに既に存在するため、他の存在がslotに入ることができない現象である。
- 32) *Song, Changsen* (2009) も「ul」格の重出現象について同様の指摘をしている。
- 33) *I, Iksep* (2005: 117) は言外の要素（ポーズ）を入れることによって、「より詳しく言えば」の意味が生ずる」と述べている。

### 参考文献

- ・本文中で言及した文献を「韓文」「和文」「欧文」に分けて掲げる。

### 韓文文献

- (※韓国語の文献名に用いられた漢字表記の一部は、日本の漢字表記法に直してある。〈 〉は韓国語の文献名の日本語訳である。なお、本文中の著者名の引用は、末尾に《 》で示したローマ字 (Yale式) 表記を用いる。)
- 金貴花 (1994) 『국어의 격 연구』〈国語の格研究〉ソウル: 韓国文化社。《*Kim, Kwihwa*》
- 金敏洙 (1971) 『국어문법론』〈國語文法論〉ソウル: 一潮閣。《*Kim, Min-swu*》
- 金柄均 (1998) 「國語基本文型の研究」〈國語基本文型の研究〉『語文論集』26, 63- 82. 中央語文学会。《*Kim, Byengkyun*》
- 김영희 (1986) 「복합 명사구, 복합 동사구 그리고 겹목적어」〈複合名詞句, 複合動詞句そして重ね目的語〉『ハンゲル』193, 47- 77. ハンゲル学会。《*Kim, Yenghyu*》
- 김영희 (1987) 「목적성 목적어의 통사론」〈目的性目的語の統辞論〉『國語学』16, 431- 458. 國語学会。
- 김용석 (1979) 「목적어 조사·을/를'에 관하여」〈目的語助詞「ul/ lul」に関して〉『말』〈ことば〉4, 29- 53. 延世大学校言語研究教育院韓国語学堂。《*Kim, Yongsek*》
- 教育部 (1991) 『고등학교 문법』〈高等学校文法〉成均館大学校大東文化研究所。
- 教育人的資源部 (2002a) 『고등학교 문법』〈高等学校文法〉ソウル大学校国語教育研究所。
- 教育人的資源部 (2002b) 『고등학교 문법 교사용지도서』〈高等学校文法教師用指導書〉ソウル大学校国語教育研究所。
- 남기심 (1996) 「이중주어구문 재고」〈二重主語構文再考〉『국어 문법의 탐구 I』〈國語文法の探求 I〉52-67. ソウル: 太学社。《*Nam, Kisisim*》

- 류구상 (1989) 「국어조사 ㅁ를에 대한 연구」〈国語助詞「*lul*」に対する研究〉『国語国文学』102, 117-146. 国語国文学会. 《*lyu, Kwusang*》
- 朴勝彬 (1935) 『朝鮮語学』朝鮮語学研究会. 《*Pak, Sungpin*》
- 서정수 (1994) 『국어문법』〈国語文法〉ソウル: Ppwulikiphunnamwu. 《*Se, Cengswu*》
- 서정수 (1996a) 『수정증보판 국어문법』〈修正増補版 国語文法〉ソウル: 漢陽大学校出版院.
- 서정수 (1996b) 『현대 한국어 문법 연구의 개관』〈現代韓国語の文法研究の概観〉ソウル: 韓国文化社.
- 成光洙 (1974) 「国語 主語 및 目的語의 重出現象에 대하여 - 格文法論的 考察을 中心으로 -」〈国語の主語及び目的語の重出現象について - 格文法論的考察を中心に -〉『文法研究』1, 209- 235. ソウル: 塔出版社. (成光洙 (1999) 『격 표현과 조사의 의미』〈格表現と助詞の意味〉に再録. 281- 311. ソウル: 月印. 本文中の引用は後者による。) 《*Seng, Kwangswu*》
- 成光洙 (1981) 「他動性 目的語와 重目的語 - 目的語 重出에 대한 再檢 -」〈他動性目的語と重目的語 - 目的語重出に対する再檢 -〉『語文論集』22, 115-127. 民族語文学会.
- 成光洙 (1990) 「国語 重目的語構成에 대한 再檢」〈国語の重目的語構成に対する再檢〉『韓国語文教育』4, 30- 44. 高麗大学校韓国語文教育研究所.
- 成光洙 (1997) 「국어 격중출 현상의 원인에 대한 재고」〈国語の格重出現象の原因に対する再考〉崔泰榮外『韓國語文學論考』ソウル: 太学社. (成光洙 (1999) 『격 표현과 조사의 의미』〈格表現と助詞の意味〉に再録. 323- 345. ソウル: 月印)
- 成光洙 (2001) 「목적어 구성 : 목적격과 조사 ' - 를'의 관계」〈目的語構成 : 目的格と助詞「*-lul*」の關係〉『한국어의 목적어』〈韓国語の目的語〉79- 101. ソウル: 月印.
- 송창선 (2001) 「'었'에 남아있는 '어 있'의 특성」〈'-ess-'に残っている'-e iss-'의 특성〉『語文学』73, 47- 66. 韓國語文学会. 《*Song, Changsen*》
- 송창선 (2008a) 「현행 학교문법에서 보여 설정의 문제점」〈現行学校文法における補語設定の問題点〉『国語教育研究』43, 83- 104. 国語教育学会.
- 송창선 (2008b) 「국어 자동사와 타동사의 구분 문제 - 이른바 자타 양용 동사를 중심으로 -」〈国語自動詞と他動詞の区分問題 - いわゆる自他兩用動詞を中心に -〉『言語科学研究』47, 35- 55. 言語科学会.
- 송창선 (2009) 「이른바 이중 목적어 구문에 대한 비판적 고찰」〈いわゆる「二重目的語構文」に対する批判的考察〉『国語教育研究』44, 301- 320. 国語教育学会.
- 송창선 (2011) 「국어의 기본 문형 설정」〈国語の基本文型設定〉『国語教育研究』

- 48, 233 - 256. 国語教育学会.
- 우형식 (1996) 『국어 타동구문 연구』〈国語他動構文研究〉ソウル: Pakiceng. 《*Wu, Hyengsik*》
- 유현경 · 이선희 (1996) 「격조사 교체와 의미역」〈格助詞交替と意味役割〉남기심 『국어 문법의 탐구Ⅲ』〈国語文法の探求Ⅲ〉129- 172, ソウル: 太学社. 《*Yu, Hyenkyeng/I, Senhuy*》
- 유형선 (2001) 「이중 목적격에 관한 일고」〈二重目的格に関する一考〉『한국어의 목적어』〈韓国語の目的語〉123- 145. ソウル: 月印. 《*Yu, Hyengsen*》
- 李寬珪 (2002) 『개정판 학교 문법론』〈改訂版 学校文法論〉ソウル: 月印. 《*I, Kwankyu*》
- 李珖鎬 (1988) 『国語 格助詞 「을/를」 의 研究』〈国語格助詞 「ul/lul」 の研究〉ソウル: 塔出版社. 《*I, Kwangho*》
- 李南淳 (1988) 『國語의 不定格과 格標識 省略』〈国語の不定格と格標識の省略〉ソウル: 塔出版社. 《*I, Namsun*》
- 李相揆 (1980) 「-을/-를의 범주와 기능」〈「-ul/-lul」의 範疇と機能〉『文学と言語』1, 123- 139. 韓國言語文學會. 《*I, Sangkyu*》
- 이운표 (1999) 『국어의 이중목적어에 관한 소고』〈国語の二重目的語に関する小考〉『국어의 격과 조사』〈国語の格と助詞〉733- 741. ソウル: 月印. 《*I, Yunpyo*》
- 이익섭 (2005) 『한국어 문법』〈韓國語文法〉소울大學出版部. 《*I, Iksep*》
- 이홍식 (2000) 『국어 문장의 주성분 연구』〈国語의 文章의 主成分研究〉소울: 月印. 《*I, Hongsik*》
- 임지룡 외 (2005) 『학교문법과 문법교육』〈学校文法と文法教育〉소울: Pakiceng. 《*Im, Cilyong*》
- 임홍빈 (1972) 「국어의 주제화 연구」〈国語의 主題化研究〉『国語研究』28, 1- 108. 国語研究会. (임홍빈 (1998) 『국어문법의 심층 2』〈国語文法の深層 2〉)에再録. 207- 281. ソウル: 太学社. 本文中의 引用は後者による.) 《*Im, Hongpin*》
- 임홍빈 (1976) 「부정법 {-어}와 상태 진술의 {-고}」〈不定法 「-e」 と狀態陳述의 「-ko」〉『國民大學校論文集』8, 13- 36. 國民大學校 (任洪彬 (1998) 『국어 문법의 심층 1』〈国語文法の深層 1〉)에再録. 593- 621. ソウル: 太学社. 本文中의 引用は後者による.)
- 임홍빈 (1980) 「{을/를} 조사의 의미와 통사」〈「ul/lul」助詞의 意味と統辭〉『韓國學論叢』2, 91- 130. 國民大學校韓國學研究所. (임홍빈 (1998) 『국어문법의 심층 2』〈国語文法の深層 2〉)에再録. 341- 377. ソウル: 太学社. 本文中의 引用は後者による.)
- 정희정 (1996) 「자동사/타동사 분류에 대한 비판적 고찰 - 사전에서의 처리

와 관련하여-」〈自動詞/他動詞分類に対する批判的考察－辞書での処理と関連し－〉남기심『국어 문법의 탐구Ⅲ』〈国語文法の探求Ⅲ〉7-32, 서울: 太学社. 《Ceng, Huiyeng》

崔鉉培 (1937) 『우리말본』〈我が言葉の語法〉延禧専門出版部. [崔鉉培 (1982) 『집고 고친 우리말본 (아홉번째고침)』〈修正増補版 我が言葉の語法 (第九版)〉 서울: 正音社, 引用は修正増補版による] 《Choy Heynpay》

## 和文文献

奥田一廣 (1979) 「朝鮮語の対格助詞「를 (을)」について－とくに、その文法機能および意義素を中心に－」『朝鮮学報』78, 1-35. 朝鮮学会.

河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社.

金 榮敏 (2002) 「日韓両言語の格重出構文をめぐる」『次世代の言語研究Ⅰ』11-40.

佐佐木隆 (2011) 「二つの目的語をもつ上代語の構文一助詞「を」の機能一」『人文』10, 21-42. 学習院大学人文科学研究所.

秦 宏一 (2009) 『英語動詞の統語法 日英語比較の新たな試み』研究社.

新屋映子 (1995) 「格助詞の重複について」『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』11-26. 専門教育出版.

杉本 武 (1986) 「格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』227-380. 凡人社.

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.

中村暁子 (2003) 「現代語における二重ヲ格について」『岡大國文論稿』31, 152-143.

益岡隆志 (1987) 「格の重複」寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人 (編) 『ケーススタディ日本文法』18-23. 桜楓社.

宮川 繁 (1989) 「使役形と語彙部門」『日本語学の新展開』187-211. くろしお出版.

文智暎 (2006) 「韓国語のul/lul格連続現象について－日本語のヲ格連続現象との対象－」『日本語と日本語学』43, 14-27.

## 欧文文献

Cho, Dong-In. 1993. "Inalienable-Type Multiple Accusative Constructions in Korean and Japanese", *Japanese/ Korean Linguistics* 2, 319-337

Fillmore, Charles J. 1968. "The case for case", In E. Bach & R. T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, New York: Holt, Reinhart & Winston, 1-88. [田中春美・船城道雄 (訳) 『格文法の原理 言葉の意味と構造』49-157. 三省堂, 1975 ]

- Fillmore, Charles J. 1971. "Some problems for case grammar", *Monograph Series on Languages and Linguistics* 24, Richard O'Brien ed. Washington D.C.: Georgetown University Press, 35- 56. [田中春美・船城道雄（訳）『格文法の原理 言葉の意味と構造』233- 265. 三省堂, 1975]
- Hopper, P. J. & Traugott, E.C. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge University Press. [日野資成（訳）『文法化』九州大学出版会, 2003]
- Hopper, P. J & Sandra A. Thompson. 1980. "Transitivity in Grammar and Discourse." *Language* 56: 2, 251- 299

### 辞書類

- 大阪外国語大学朝鮮語研究室（1986）『朝鮮語大辞典』角川書店。
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一（1996）『言語学大辞典 第6巻 述語編』三省堂。
- 『標準国語大辞典』国立国語院 WEB版[http://www.korean.go.kr/09\\_new/index.jsp](http://www.korean.go.kr/09_new/index.jsp)

A Study of Double-*ul* Constructions in Korean

WOO, Daeyoung

In modern Korean it is said that “double-*ul* constructions”, a transitive verb taking two objects, are used relatively freely. However, it has not been studied how much this constructions are acceptable to native speakers of Korean. In addition, how the “double-*ul* constructions” can be interpreted in Korean has not given a clear conclusion yet. In order to add up to the previous researches, this paper tries to explore more about the “double-*ul* constructions” through the following two specific points. Firstly, a questionnaire survey about five types of *Se, Cengswu* (1996a) is conducted. Based on the results, “double-*ul* constructions” are reconsidered. Secondly, after examining the functions of “case particle” and “auxiliary particle” of Korean “*ul*”, it is pointed out that “double-*ul* constructions” actually arise from the intention of the speaker to try to emphasize some specific subjects, which indicates a reverse movement of language use from “auxiliary particle” to “case particle”.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程4年)